

松蔭 校長室だより

2020年1月17日発行

—校長から保護者の皆さまへのメッセージです—

松蔭中学校・高等学校
校長 浅井宣光

あなたがたを襲った試練で、人間として耐えられないようなものはなかったはず。神は真実な方です。あなたがたを耐えられないような試練に遭わせることはなさらず、試練と共に、それに耐えられるよう逃れる道をも備えていてくださいます。(コリントの信徒への手紙Ⅰ 10:1~13)

1月17日

図書館に入って左手に進むと、閲覧席をはさんで2つの鳩時計が真向かいに架けられています。25年前の大地震は時計の針を5時46分で止め、現在もそのままです。17日朝、全校生が講堂に集まり、阪神・淡路大震災で命を失った生徒2名、生徒の家族6名、卒業生15名を含む6434名の犠牲者を悼み、礼拝の時間を持ちました。また、終礼後にはチャペルで教職員などによる追悼の礼拝も行いました。校内の「モーヴの広場」の一角に、高さ5メートルほどの樹木(右写真)があります。これは学問の木と言われる楷(かい)の木です。2005年、震災から10年目の祈念樹として植えました。現在の在校生も含めて、地震を経験していない神戸市民が4割を超えたと言われています。今日も校内には生徒たちの朗らかな声がいつもとおりに響いていますが、これからも震災を語る時間を持ち続けたいと考えています。



<モーヴの広場の楷の木>

25年前、地震発生からしばらくの間は臨時休校が続きました。4月になり、新入生を迎えて新しい学年が始まりました。生徒も教職員も、様々な思いを抱きながら、学校生活をもと通りに戻っていったのです。その年の暮れに、震災の記録を残すために震災記録集「阪神・淡路大震災と私たち」(右上写真)をまとめました。記録集には、学校再開までの取り組みや、生徒・教職員の作文、全国から学校に寄せられた支援物資や義援金の額まで、震災に向き合った学校に関する1年間の記録が詳細に記されています。毎年1月17日が近づくと、私はこの記録集を取り出しては当時を振り返ることにしています。

40歳前後となった当時の生徒の手記とともに、自宅で生き埋めとなって亡くなった生徒のお母様から寄せられた手記を読み返しました。そこには、震災発生時とその後の事実、そしてご自身の思いが冷静に記されていました。「この世に何が起ころうとも娘の命を助けたかった。お母さんなのに守りきれなかったと思われてなりません」と締めくくっておられます。自分の命に代えても守りたいと思う命があります。当時も今もそのことに変わりはありません。



<記録集「阪神・淡路大震災と私たち」は図書館で閲覧できます。>

表紙のタイトルバックに見える仮名(かな)混じり文は、1185(元暦2)年夏、平安時代末の京都を襲った大地震について述べた「方丈記」の一節です。作者の鴨長明は地震体験を無常観をもって次のように記しています。「大地が揺れ、家の壊れる音はさながら雷鳴を聞くようである。家のなかにいれば、たちまちつぶされそうになり、戸外へ走り出せば地面が割れ裂ける。」「亡くなった子を父母が抱えて声のかぎりに泣き叫んでいたのがあまりにあわれて、悲しい思いで見ている。」「事件直後(大地震)はさすがに人々も、みな世の無常を語り合っ、おかげで心の汚れもいくらかは薄らいでいくかに見えたものだが、月日が重なり年が経つうちに、早くもこの惨事を忘れたか、口に出して語るひとすらなくなってしまった。」(口語訳)

1929(昭和4)年、学校が現在の青谷に移転した際、松蔭女子学院の理事長を務めていた聖公会の英国人宣教師バジル主教は、地震が多い日本では対策が不可欠だと考えて校地を念入りに整地するよう指示しました。松蔭が開校する3ヶ月前(1891年10月)に起こった濃尾地震は、岐阜県を震源とし、内陸地震としては国内最大規模のマグニチュード8.0と推定されています。聖公会の宣教師など教会関係者が、負傷者を救護し、家を失い飢餓に苦しむ人々を支援したと記録にあります。1923年の関東大震災でもいくつかの教会や学校が被災しました。阪神・淡路大震災が起こるまで、神戸には地震がない、と言われていましたし、私自身もそのように聞いた記憶がありますが、1世紀をさかのぼる時代に、バジル理事長が日本各地で起こっている地震を知り、神戸で防災の観点に立って校地移転をすすめていた姿を思い浮かべます。

次年度早々にも、校内に学校防災委員会を立ち上げるとともに、緊急時には生徒を学校に宿泊させることができるよう防災備品や食料の備蓄をしています。これまで避難訓練を中心に行っていた防災教育も、この学校防災委員会が主体となって拡充していく予定です。また、登下校時など単独で行動している際の地震発生に備え、対処するべきことや心構えを記載した「防災カード(仮称)」を作成し、生徒手帳に挟んで常に携帯できるように準備をしています。自分の命を守り、人の命も守るための知識を深め、行動できるように学んでいきたいと考えています。

図書館のもうひとつの鳩時計は、今も変わりなく時を刻み続けています。時代は流れ世の中は変わっていきますが、あらためて昔も今も大切にしなければならないものは同じだと思います。

20年目の21世紀を迎えて 変化をおそれることなく

「ニジューイッセイキ」の響きは、昭和生まれの私どもの世代にとって、社会の変化を待ちわびるような特別な空気感で包まれていたように記憶しています。実際はというと、2002年、3年を迎えても日常に変化を実感することはなく、高校野球の「21世紀枠」やら「21世紀〇〇」やらの冠(かんむり)が付されていることに、

(裏面に続く)

何となく新世紀気分を味わいながら年月が過ぎていきました。漫画家の手塚治虫さんが「鉄腕アトム」を世に送り出したのは半世紀以上前ですが、アトムは2003年生まれでした。現実にはその10年後、AI(人口知能)を備え人と同等の感情を認識する人型ロボット、ペッパー君がデビューしています。ちなみにアトムのように原子力をエネルギーとはしていません。2007年、iPhoneが販売され、10年のうちに老若男女を問わずスマホを使うことが当たり前になりました。ICTの発展は国内、国外の物理的距離を大幅に縮め、自宅にしながら世界各地の情報に触れて人と交流できるようになりました。松蔭でも4年前から海外とのオンライン英会話授業を導入していますし、今後3か年計画で生徒1人1台のICT端末を実現する予定です。海外研修前にメールやスカイプでホストシスターと友情を育むこともできるでしょう。21世紀も20年目にしようやく社会の変化が目に見えるようになったと感じていますが、いかがでしょうか。歴史を振り返ると、明治維新の頃も第2次大戦の敗戦後も、社会の枠組みの変化や新しい文物の流入のなかで人々は暮らし向きを心配しながら毎を送りました。ふと気付けば、生活や思考のスタイルが変化していたという姿と重なります。

昨年暮れに報じられたレポート「18歳意識調査 第20回 社会や国に対する意識調査」(日本財団2019年11月30日発表)は衝撃的でした。日本、インド、インドネシア、韓国、ベトナム、中国、英国、米国、ドイツの9か国の17~19歳男女1000名ずつのインターネット調査です。「衝撃的」という理由は、日本が最下位となっている項目にあります。例をあげると「自分は責任がある社会の一員だと思う」の項目では、9か国中で日本が最低の44.8%。他国はすべて70%以上で最高のインドは92%です。「社会課題について家族や友人など周りの人と積極的に議論している」では、韓国(55.0%)、米国(68.4%)を下位として他国は70~80%台ですが、日本は27.2%。政治、貧困、気候変動、社会的弱者やマイノリティーにジェンダーの問題、高齢者福祉など、自国を含めた世界の現実について、21世紀に生まれ、日本社会で育った18歳の若者は、自分には関係がなく、いわば「人ごと」と考える割合が非常に大きいと結論付けることができます。

社会の当事者意識の欠落について、教育において何が問題だったのか、どのような教育コンテンツ導入が遅れていたのかという観点から考えると、次年度より小中高と順次実施される学習指導要領の改訂の方向性が理解できるように思います。中学、高校においては、英語4技能習得、思考力や表現力とICTリテラシーの育成を通じて、上に述べた世界の現実、すなわち社会課題にアプローチできます。他国の教育内容に学ぶべき点もあるでしょう。社会の変革に学校が乗り遅れることは、そこで学ぶ生徒の将来の損失に直結するという意識に立ち、今後の学校作り、教育作りを考えなければなりません。そのうえで、人、物、情報の往来に振り回されることなく着実に対応できる、地に足のついた人間力を育むことも求められます。大学新入試をめぐる混乱はご承知のとおりです。高大接続、すなわち入試制度改革によって学校教育を改革しようとしたことが失敗の原因と言われていますが、私見でも入試制度改革は教育改革の最後にすべきだと考えています。

武蔵野大学附属千代田高等学院との教育交流協定

公立校は行政主導で予算も人もコンテンツもいわば「上」から降りてくるのですが、私学は小回りが利く分、教育活動の幅を広げるために意識して「外に出る」必要があります。前号で紹介した聖ミカエル国際学校(SMIS)との教育提携もその取り組みのひとつです。昨年末、東京都千代田区にある武蔵野大学附属千代田高等学院と教育交流協定を締結しました。高校課程のみの共学校ですが、バカロレアコースやアスリートコースを設置しており、今後、様々な面で教育交流をはかっていきたいと考えています。